紅玉

泉鏡花

青空文庫

目次

紅茶会 5
三両二分 11
通う神 15
紀の国屋 16
段階子 18
手鞠の友 24
湯帰り 26
描ける幻 28
朝参詣 29
言語道断 30

下かた 33
狂犬源兵衛 36
半札の円輔 42
犬張子 45
胸騒 47
鶯 48
白木の箱 51
灰神楽 55
星 58

時――現代、初冬。
場所――府下郊外の原野。
人物――画工。侍女（烏の仮装したる）。貴夫人。
老紳士。少紳士。小児五人。――別に、
三羽の烏（侍女と同じ扮装）。

小児一　やあ、停車場の方の、遠くの方から、あんなものが遣つて来たぜ。
小児二　何だい〳〵。
小児三　あゝ、大なものを背負つて、蹌踉々々来るねえ。
小児四　影法師まで、ぶら〳〵して居るよ。
小児五　重いんだらうか。
小児一　何だ、引越かなあ。
小児二　構ふもんか、何だつて。
小児三　御覧よ、脊よりか高い、障子見たやうなものを背負つてるから、凧が歩行いて来るやうだ。
小児四　糸をつけて揚げる真似エして遣らう。
小児五　遣れ〳〵、おもしろい。
　凧を持つたのは凧を上げ、独楽を持ちたるは独楽を廻す。手にものなき一人、一方に向ひ、凧の糸を手繰る真似して笑ふ。
画工　（枠張のまゝ、絹地の画を、やけに紐からげにして、薄汚れたる背広の背に負ひ、初冬、枯野の夕日影にて、あか〳〵と且つ寂しき顔。酔へる足どりにて登場）……落第々々、大落第。（ぶらつく体を杖に突掛くる状、疲切つたる樵夫の如し。しばらくして、叫ぶ）畜生、状を見やがれ。
　声に驚き、且つ活ける玩具の、手許に近づきたるを見て、糸を手繰りたる小児、衝と開いて素知らぬ顔す。
　画工、其の事には心付かず、立停まりて嬉戯する小児等を※す。よく遊んでるな、あゝ、羨しい。何うだ。皆、面白いか。
　小児等、彼の様子を見て忍笑す。中に、糸を手繰りたる一人。
小児三　あゝ、面白かつたの。
画工　（管をまく口吻）何、面白かつた。面白かつたは不可んな。今の若さに。……小児をつかまへて、今の若さも変だ。（笑ふ）はゝゝは、面白かつたは心細い。過去つた事のやうで情ない。面白いと云へ。面白がれ、面白がれ。尚ほ其の上に面白く成れ。むゝ、何うだ。
小児三　だつて、兄さん怒るだらう。
画工　（解し得ず）俺が怒る、何を……何を俺が怒るんだ。生命がけで、描いて文部省の展覧会で、平つくばつて、可いか、洋服の膝を膨らまして膝行つてな、いゝ図ぢやないぜ、審査所のお玄関で頓首再拝と仕つた奴を、紙鉄砲で、ポンと撥ねられて、ぎやふんとまゐつた。それでさへ怒り得ないで、悄々と杖に縋つて背負つて帰る男ぢやないか。景気よく馬肉で呷つた酒なら、跳ねも、いきりもしようけれど、胃のわるい処へ、げつそりと空腹と来て、蕎麦ともいかない。停車場前で饂飩で飲んだ、臓腑が宛然蚯蚓のやうな、しツこしのない江戸児擬が、何うして腹なんぞ立て得るものかい。ふん、だらしやない。
　他の小児はきよろ〳〵見て居る。
小児三　何だか知らないけれどね、今、向うから来る兄さんに、糸

目をつけて手繰つて居たんだぜ。

画工　何だ、糸を着けて……手繰つたか。いや、怒りやしない。何の真似だい。

小児一　兄さんがね、然うやつてね、ぶら〳〵来た処がね。

小児二　遠くから、まるで以て、凧の形に見えたんだもの。

画工　はゝあ、凧か。（背負つてる絵を見る）むゝ、其処で、（仕形しつゝ）と遣つて面白がつて居たんだな。処で、俺が恁う近く来たから、怒られやしないかと思つて、其の悪戯を止めたんだ。だから、面白かつたと云ふのか。……かつたは寂しい、つまらない。壮に面白がれ、もつと面白がれ。さあ、糸を手繰れ、上げろ、引張れ。俺が、凧に成つて、上つて遣らう。上つて、高い空から、上野の展覧会を見て遣る。京、大阪を見よう。日本中を、いや世界を見よう。……さあ、あの児来て煽れ、それ、お前は向うで上げるんだ。さあ、遣れ、遣れ。（笑ふ）はゝゝ、面白い。

小児等しばらく逡巡す。画工の機嫌よげなるを見るより、一人は、画工の背を抱いて、凧を煽る真似す。一人は駈出して距離を取る。其の一人。

小児三　やあ、大凧だい、一人ぢや重い。

小児四　うん、手伝つて遣ら。（と独楽を懐にして、立並ぶ）――

風吹け、や、吹け。山の風吹いて来い。――（同音に囃す。）

画工　（あふりたる児の手を離るゝと同時に、大手を開いて）恁う成りや凧絵だ、提灯屋だ。そりや、しやくるぞ、水汲むぞ、べつかつこだ。

小児等の糸を引いて駈るがまゝに、ふら〳〵と舞台を飛廻り、やがて、樹根に※と成りて、切なき呼吸つく。

暮色到る。

小児三　凧は切れ了つた。

小児一　暗く成つた。――丁ど可い。

小児二　又、……あの事をしよう。

其の他　遣らうよ、遣らうよ。――（一同、手はつながず、少しづゝ間をおき、くるりと輪に成りて唄ふ。）

青山、葉山、羽黒の権現さん

あとさき言はずに、中はくぼんだ、おかまの神さん

唄ひつゝ、廻りつゝ、繰返す。

画工　（茫然として黙想したるが、吐息して立つて此を視む。）おい、おい、其は何の唄だ。

小児一　あゝ、何の唄だか知らないけれどね、恁うやつて唄つて居ると、誰か一人踊出すんだよ。

画工　踊る？　誰が踊る。

小児二　誰が踊るつて、此のね、環の中へ入つて蹲んでるものが踊るんだつて。

画工　誰も、入つては居らんぢやないか。

小児三　でもね、気味が悪いんだもの。

画工　気味が悪いと？

小児四　あゝ、あの、其がね、踊らうと思つて踊るんぢやないんだよ。ひとりでにね、踊るの。踊るまいと思つても。だもの、気味が悪いんだ。

画工　遣つて見よう、俺を入れろ。

一同　やあ、兄さん、入るかい。

画工　俺が入る、待て、（画を取つて大樹の幹によせかく）さあ、

可いか。

小児三　目を塞いで居るんだぜ。

画工　可、此の世間を、酔つて踊りや本望だ。

青山、葉山、羽黒の権現さん

小児等唄ひながら画工の身の周囲を廻る。環の脈を打つて伸び且つ縮むに連れて、画工、殆んど、無意識なるが如く、片手又片足を異様に動かす。唄ふ声、愈々冴えて、次第に暗く成る。時に、樹の蔭より、顔黒く、嘴黒く、烏の頭して真黒なるマント様の衣を裾まで被りたる異体のもの一個顕れ出で、小児と小児の間に交りて斉しく廻る。

地に踞りたる画工、此の時、中腰に身を起して、半身を左右に振つて踊る真似す。

続いて、初の黒きものと同じ姿したる三個、人の形の烏、樹蔭より顕れ、同じく小児等の間に交つて、画工の周囲を繞る。

小児等は絶えず唄ふ。いづれも其の怪き物の姿を見ざる趣なり。あとの三羽の烏出でて輪に加はる頃より、画工全く立上り、我を忘れたる状して踊り出す。初手の烏もともに、就中、後なる三羽の烏は、足も地に着かざるまで跳梁す。

彼等の踊狂ふ時、小児等は唄を留む。

一同　（手に手に石を二ツ取り、カチ〳〵と打鳴らして）魔が来た、でん〳〵。影がさいた、もんもん。（四五度口々に寂しく囃す）

真個に来た。そりや来た。

小児のうちに一人、誰とも知らず恁く叫ぶとともに、ばら〳〵と、左右に分れて逃げ入る。

木の葉落つ。

木の葉落つる中に、一人の画工と四個の黒き姿と頻に踊る。画工は靴を穿いたり。後の三羽の烏皆爪尖まで黒し。初の烏ひとり、裾をこぼるゝ褄紅に、足白し。

画工　（疲果てたる状、※と仰様に倒る）水だ、水をくれい。

いづれも踊り留む。後の烏三羽、身を開いて一方に翼を交はしたる如く、腕を組合せつゝ立ちて視む。

初の烏　（うら若き女の声にて）寝たよ。まあ……だらしのない事。人間、恁うは成りたくないものだわね。——其のうちに目が覚めたら行くだらう——別にお座敷の邪魔にも成るまいから。……どれ、（樹の蔭に一むら生茂りたる薄の中より、組立てに交叉したる三脚の竹を取出して据ゑ、次に、其上に円き板を置き、卓子の如くす。）

後の烏、此の時、三羽とも無言にて近づき、手伝ふ状にて、二脚のズツク製、おなじ組立ての床几を卓子の差向ひに置く。

初の烏、又、旅行用手提げの中より、葡萄酒の瓶を取出だし卓子の上に置く。後の烏等、青き酒、赤き酒の瓶、続いてコツプを取出だして並べ揃ふ。

やがて、初の烏、一挺の蝋燭を取つて、此に火を点ず。

舞台明くなる。

初の烏　（思ひ着きたる体にて、一ツの瓶の酒を玉盞に酌ぎ、燭に翳す。）おゝ、綺麗だ。燭が映つて、透徹つて、いつかの、あの時、夕日の色に輝いて、丁ど東の空に立つた虹の、其の虹の目のやうだと云つて、薄雲に翳して御覧なすつた、奥様の白い手の細い指には重さうな、指環の球に似てること。

三羽の烏、打傾いて聞きつゝあり。

あゝ、玉が溶けたと思ふ酒を飲んだら、どんな味がするだらうねえ。（烏の頭を頂きたる、咽喉の黒き布をあけて、少き女の面を顕し、酒を飲まんとして猶予ふ）あれ、こゝは私には口だけれど、烏にすると丁ど咽喉だ。可厭だよ。咽喉だと血が流れるやうでねえ。こんな事をして居るんだから、気に成る。よさう。まあ、独言を云つて、誰かと話をして居るやうだよ……

（四辺を※す）然う〳〵、思つた同士、人前で内証で心を通はす時は、一ツに向つた卓子が、人知れず、脚を上げたり下げたりする、幽な、しかし脈を打つて、血の通ふ、其の符牒で、黙つて居て、暗号が出来ると、何時も奥様がおつしやるもんだから。——卓子さん（卓をたゝく）殊にお前さんは三ツ脚で、狐狗狸さん、其のまゝだもの。活きてるも同じだと思ふから、つい、お話をしたんだわ。しかし、うつかりして、少々大事なことを饒舌つたんだから、お前さん聞いたばかりにして置いておくれ。誰にも言つては不可いよ。一寸、注いだ酒を何うしよう。ああ、いゝ事がある。（酔倒れたる画工に近づく。後の烏一ツ、同じく近寄りて、画工の項を抱いて仰向けにす。）

酔ぱらひさん、さあ、冷水。

画工　（飲みながら、現にて）あゝ、日が出た、が、俺は暗夜だ。

（其まゝ寝返る。）

初の烏　日が出たつて——赤い酒から、私の此の烏を透かして、まあ。——画に描いた太陽の夢を見たんだらう。何だか謎のやうな事を言つてるわね。——さあ〳〵、お寝室こしらへをして置きませう。（もとに立戻りて、又薄の中より、此のたびは一領の天幕を引出し、卓子を蔽うて建廻はす。三羽の烏、左右より此を手伝ふ。天幕の裡は、見ぶつ席より見えざるあつらへ。）お楽みだわね。（天幕を背後にして正面に立つ。三羽の烏、其の両方にイむ。）

もう、すつかり日が暮れた。（時に、はじめてフト自分の他に、烏の姿ありて立てるに心付く。されどおのが目を怪む風情。少しづゝ、あちこち歩行く。歩行くに連れて、烏の形動き絡ふを見て、次第に疑惑を増し、手を挙ぐれば、烏等も同じく挙げ、袖を振動かせば、斉しく振動かし、足を爪立つれば爪立ち、踞めば踞むを透し視めて、今はしも激しく恐怖し、慌しく駈出す。）

帽子を目深に、オーバーコートの鼠色なるを被、太き洋杖を持てる老紳士、憂鬱なる重き態度にて登場。

初の烏ハタと行当る。驚いて身を開く。紳士其の袖を捉ふ。初の烏、遁れんとして威す真似して、かあ〳〵、と烏の声をなす。泣くが如き女の声なり。

紳士　こりや、地獄の門を背負つて、空を飛ぶ真似をするか。（掴ひしぐが如くにして突離す。初の烏、※と地に坐す。三羽の烏は故とらしく吃驚の身振をなす。）地を這ふ烏は、鳴く声が違ふぢやらう。うむ、何うぢや。地を這ふ烏は何と鳴くか。

初の烏　御免なさいまし。何うぞ、御免なさいまし。

紳士　はゝあ、御免なさいましと鳴くか。（繰返して）御免なさいましと鳴くぢやな。

初の烏　はい。

紳士　うむ、（重く頷く）聞えた。とに角、汝の声は聞えた。——こりや、俺の声が分るか。

初の烏　えゝ。

紳士　俺の声が分るかと云ふんぢや。こりや、面を上げろ。――何うだ。

初の烏　御前様、あれ……

紳士　（杖を以つて、其の裾を圧ふ）ばさ〳〵騒ぐな。槍で脇腹を突かれる外に、樹の上へ得上る身体でもないに、羽ばたきをするな、女郎、手を支いて、静として口をきけ。

初の烏　真に申訳のございません、飛んだ失礼をいたしました。……先達つて、奥様がお好みのお催しで、お邸に園遊会の仮装がございました時、私がいたしました、あの、此のこしらへが、余りよく似合つたと、皆様が然うおつしやいましたものでございますから、つい、心得違ひな事をはじめました。あの――後で、御前様が御旅行を遊ばしましたお留守中は、お邸にも御用が少うございますものですから、自分の買もの、用達しだの、何のと申して、奥様にお暇を頂いては、こんな処へ出て参りまして、偶に通りますものを驚かしますのが面白くて成りませんので、つい、あの、癖になりまして、今晩も……旦那様に申訳のございません失礼をいたしました。何うぞ、御免遊ばして下さいまし。

紳士　言ふ事は其だけか。

初の烏　はい？（聞返す。）

紳士　俺に云ふ事は、それだけか、女郎。

初の烏　あの、（口籠る）今夜は何ういたしました事でございますか、私の形……あの、影法師が、此の、野中の宵闇に判然と見えますのでございます。其さへ気味が悪うございますのに、気をつけて見ますと、二つも三つも、私と一所に動きますのでございますもの。

三方に分れて彳む、三羽の烏、また打頷く。

もう可恐く成りまして、夢中で駈出しましたものですから、御前様に、つい――あの、そして……御前様は、何時御旅行さきから。

紳士　俺の旅行か。ふゝん。（自ら嘲ける口吻）汝たちは、俺が旅行をしたと思ふか。

初の烏　はい、一昨日から、北海道の方へ。

紳士　俺の北海道は、すぐに俺の邸の周囲ぢや。

初の烏　はあ、（驚く。）

紳士　俺の旅行は、冥土の旅の如きものぢや。昔から、事が、恁う云ふ事が起つて、其が破滅に近づく時は、誰もするわ。平凡な手段ぢや。通例過ぎる遣方ぢやが、為んと云ふ事には行かなかつた。今云うた冥土の旅を、可厭ぢやと思うても、誰もしないわけには行かぬやうなものぢや。又、汝等とても、恁う云ふ事件の最後の際には、其の家の主人か、良人か、可えか、俺がぢや、或手段として旅行するに極つとる事を知つて居る。汝は知らいでも、怜悧な彼は知つて居る。汝とても、少しは分つて居らう。分つて居て、其の主人が旅行と云ふ隙間を狙ふ。故と安心して大胆な不埒を働く。うむ、耳を蔽うて鐸を盗むと云ふのぢや。いづれ音の立ち、声の響くのは覚悟ぢやらう。何も彼も隠さずに言つて了へ。何時の事か。一体、何時頃の事か。これ。

侍女　何時頃とおつしやつて、あの、影法師の事でございませうか。其は唯今……

紳士　黙れ。影法師か何か知らんが、汝等三人の黒い心が、形にあらはれて、俺の邸の内外を横行しはじめた時だ。

侍女　御免遊ばして、御前様、私は何にも存じません。

紳士　用意は出来とる。女郎、俺の衣兜には短銃があるぞ。

侍女　えゝ。

紳士　さあ、言へ。

侍女　御前様、お許し下さいまし。春の、暮方の事でございます。美しい虹が立ちまして、盛りの藤の花と、つゝじと一所に、お庭の池に影の映りましたのが、薄紫の頭で、胸に炎の搦みました、真紅なつゝじの羽の交つた、其の虹の尾を曳きました大きな鳥が、お二階を覗いて居りますやうに見えたのでございます。其の日は、御前様のお留守、奥様が欄干越に、其の景色をお視めなさいまして、――あゝ、綺麗な、此の白い雲と、蒼空の中に漲つた大鳥を御覧――お傍に居りました私に然うおつしやいまして――此の鳥は、頭は私の簪に、尾を私の帯に成るために来たんだよ。角の九つある、竜が、頭を兜に、尾を草摺に敷いて、敵に向ふ大将軍を飾つたやうに。……けれども、虹には目がないから、私の姿が見つからないので、頭を水に浸して、うなだれ悄れて居る。どれ、目を遣らう――と仰有いますと、右の中指に嵌めておいで遊ばした、指環の紅い玉でございます。開いては虹に見えぬし、伏せては奥様の目に見えません。ですから、其の指環をお抜きなさいまして。

紳士　うむ、指環を抜いてだな。うむ、指環を抜いて。

侍女　そして、雪のやうなお手の指を環に遊ばして、高い処で、青葉の上で、虹の膚へ嵌めるやうになさいますと、其の指に空の色が透通りまして、紅い玉は、颯と夕日に映つて、まつたく虹の瞳に成つて、そして晃々と輝きました。其の時でございます。お庭も池も、真暗に成つたと思ひます。虹も消えました。黒いものが、ばつと来て、目潰しを打ちますやうに、翼を拡げたと思ひますと、其の指環を、奥様の手から攫ひまして、烏が飛びましたのでございます。露に光る木の実だ、と紅い玉を、間違へたのでございませう。築山の松の梢を飛びまして、遠くも参りませんで、塀の上に、此の、野の末の処へ入ります、真赤な、まん円な、大きな太陽様の前に黒く留まつたのが見えたのでございます。私は跣足で庭へ駈下りました。駈けつけて声を出しますと、烏は其のまゝ塀の外へ又飛びましたのでございます。丁ど其処が、裏木戸の処でございます。あの木戸は、私が御奉公申しましてから、五年と申しますもの、お開け遊ばした事と云つては一度もなかつたのでございます。

紳士　うむ、あれは開けるべき木戸ではないのぢや。俺が覚えてからも、止むを得ん凶事で二度だけは開けんければ成らんぢやつた。が、其とても凶事を追出いたばかりぢや。外から入つて来た不祥はなかつた。――其が其の時、汝の手で開いたのか。

侍女　えゝ、錠の鍵は、がつちりさゝつて居りましたけれど、赤錆に錆切りまして、圧しますと開きました。くされて落ちたのでございます。塀の外に、散歩らしいのが一人立つて居たのでございます。其の男が、烏の嘴から落しました奥様の其の指環を、掌に載せまして、凝と見て居ましたのでございます。

紳士　餓鬼め、其奴か。

侍女　えゝ。

紳士　相手は其奴ぢやな。

侍女　あの、私がわけを言つて、其の指環を返しますやうに申しますと、串戯らしく、否、此は、人間の手を放れたもの、烏の嘴

から受取つたのだから返されない。尤も、烏にならば、何時なりとも返して上げよう——と然う申して笑ふんでございます。それでも、何うしても返しません。そして——確に預る、決して迂散なものでない——と云つて、丁と、衣兜から名刺を出してくれました。奥様は、面白いね——とおつしやいました。それから日を極めまして、同じ暮方の頃、其の男を木戸の外まで呼びましたのでございます。其の間に、此の、あの、烏の装束をお誂へ遊ばしました。そして私がそれを着て出まして、指環を受取りますつもりなのでございましたが、なぶつて遣らう、とおつしやつて、奥様が御自分に烏の装束をおめし遊ばして、塀の外へ——でも、ひよつと、野原に遊んで居る小児などが怪しい姿を見て、騒いで悪いと云ふお心付きから、四阿へお呼び入れに成りました。

紳士　奴は、あの木戸から入つたな。あの、木戸から。

侍女　男が吃驚するのを御覧、と私にお囁きなさいました。奥様が、烏は脚では受取らない、とおつしやつて、男が掌にのせました指環を、此処をお開きなさいまして、（咽喉のあく処を示す）口でおくはへ遊ばしたのでございます。

紳士　口でな、最う其の時から。毒蛇め。上顎下顎へ拳を引掛け、透通る歯と紅さいた唇を、めりめりと引裂く、売婦。（足を挙げて、枯草を踏蹂る。）

画工　うゝむ、（二声ばかり、夢に魘されたるものの如し。）

紳士　（はじめて心付く）女郎、此方へ来い。（杖を以て一方を指す。）

侍女　（震へながら）はい。

紳士　頭を着けろ、被れ。俺の前を烏のやうに躍つて行け、——飛べ。邸を横行する黒いものの形を確と見覚えて置かねばならん。躍れ。衣兜には短銃があるぞ。

侍女、烏の如く其の黒き袖を動かす。をのゝき震ふと同じ状なり。紳士、あとに続いて入る。

三羽の烏　（声を揃へて叫ぶ）おいらのせゐぢやないぞ。

一の烏　（笑ふ）はゝゝゝゝ、其処で何と言はう。

二の烏　せう事はあるまい。矢張り、あとは、烏の所為だと言はねば成るまい。

三の烏　すると、人間のした事を、俺たちが引被るのだな。

二の烏　かぶらうとも、背負はうとも。かぶつた処で、背負つた処で、人間のした事は、人間同士が勝手に夥間うちで帳面づらを合せて行く、勘定の遣り取りする。俺たちが構ふ事は少しもない。

三の烏　成程な、罪も報も人間同士が背負ひつこ、被りつこをするわけだ。一体、此のたびの事の発源は、其処な、お一どのが悪戯からはじまつた次第だが、さて、恁うなれば高い処で見物で事が済む。嘴を引傾げて、ことん〳〵と案じて見れば、われらは、これ、余り性の善い夥間でないな。

一の烏　いや、悪い事は少しもない。人間から言はせれば、善いとも悪いとも言はうがまゝだ。俺は唯屋の棟で、例の夕飯を稼いで居たのだ。処で艶麗な、奥方とか、それ、人間界で言ふものが、虹の目だ、虹の目だ、と云ふものを（嘴を指す）此の黒い、鼻の先へひけらかした。此の節、肉どころか、血どころか、贅沢な目玉などはつひに賞翫した験がない。鳳凰の髄、麒麟の腮さへ、世にも稀な珍味と聞く。虹の目玉だ、やあ、八千年生延びろ、と逆落しの廂はづれ、鴨越を遣つたがよ、生命がけの仕事と思へ。

鳶なら油揚も攫はうが、人間の手に持つたまゝを引手繰る段は、お互に得手でない。首尾よく、かちりと銜へてな、スポンと中庭を抜けたは可かつたが、虹の目玉と云ふ件の代ものは何うだ、歯も立たぬ。や、堅いの候の。先祖以来、田螺を突つくに錬へた口も、さて、がつくりと参つたわ。お庇で舌の根が弛んだ。癪だがよ、振放して素飛ばいたまでの事だ。な、其が源で、人間が何をせうと、彼をせうと、薩張俺が知つた事ではあるまい。

二の烏　道理かな、説法かな。お釈迦様より間違ひのない事を云ふわ。いや、又お一どのの指環を銜へたのが悪ければ、晴上つた雨も悪し、ほか〳〵とした陽気も悪し、虹も悪い、と云はねば成らぬ。雨や陽気がよくないからとて、何うするものだ。得ての、空に美しい虹の立つ時は、地にも綺麗な花が咲くよ。芍薬か、牡丹か、菊か、猿が折つて蓑にさす、お花畑のそれでなし不思議な花よ。名も知れぬ花よ。雑と虹のやうな花よ。人間の家の中に、然うした花の咲くのは壁にうどんげの開くとおなじだ。俺たちが見れば、薄暗い人間界に、眩い虹のやうな、其の花のパツと咲いた処は鮮麗だ。な、家を忘れ、身を忘れ、生命を忘れて咲く怪しい花ほど、美しい眺望はない。分けて今度の花は、お一どのが蒔いた紅い玉から咲いたもの、吉野紙の霞で包んで、露をかためた硝子の器の中へ密と蔵つても置かうものを。人間の黒い手は、此を見るが最後掴み散らす。当人は、黄色い手袋、白い腕飾と思ふさうだ。お互に見れば真黒よ。人間が見て、俺たちを黒いと云ふと同一かい、別して今来た親仁などは、鉄棒同然、腕に、火の舌を搦めて吹いて、右の不思議な花を微塵にせうと苛つて居るわ。野暮めがな。はて、見て居れば綺麗なものを、仇花なりとも美しく咲かして置けば可い事よ。

三の烏　なぞとな、お二めが、体の可い事を吐す癖に、朝烏の、朝桜、朝露の、朝風で、朝飯を急ぐ和郎だ。何だ、仇花なりとも、美しく咲かして置けば可い事だ。から〳〵からと笑はせるな。お互に此処に何して居る。其の虹の散るのを待つて、やがて食はう、突かう、嘗めう、しやぶらうと、毎夜、毎夜、此の間、……咽喉、嘴を、カチ〳〵と噛鳴らいて居るのでないかい。

二の烏　然ればこそ待つて居る。桜の枝を踏めばと云つて、虫の数ほど花片も露もこぼさぬ俺たちだ。此のたびの不思議な其の大輪の虹の台、紅玉の蕊に咲いた花にも、俺たちが、何と、手を着けるか。雛芥子が散つて実に成るまで、風が誘ふを視めて居るのだ。色には、恋には、情には、其の咲く花の二人を除けて、他の人間は大概風だ。中にも、ぬしと云ふものはな、主人と云ふものはな、淵に棲むぬし、峰にすむ主人と同じで、此が暴風雨よ、旋風だ。一溜りもなく吹散らす。あゝ、無慙な。

一の烏　と云ふ嘴を、こつ〳〵鳴らいて、内々其の吹き散るのを待つのは誰だ。

二の烏　はゝゝはゝ、俺達だ、はゝゝはゝ。先づ口だけは体の可い事を言うて、其の実はお互に餌食を待つのだ。又、此の花は、紅玉の蕊から虹に咲いたものだが、散る時は、肉に成り、血に成り、五色の膸と成る。やがて見ろ、脂の乗つた鮫鰊のひも、と云ふ珍味を、つるりだ。

三の烏　何時の事だ、あゝ、聞いただけでも堪らぬわ。（ばた〳〵と羽を煽つ。）

二の烏　急ぐな、どつち道俺たちのものだ。餌食が其の柔かな白々

とした手足を解いて、木の根の塗膳、錦手の木の葉の小皿盛と成るまでは、精々、咲いた花の首尾を守護して、夢中に躍跳ねるまで、楽ませて置かねば成らん。網で捕つたと、釣つたとでは、鯛の味が違ふと言はぬか。あれ等を苦ませては成らぬ、悲ませては成らぬ、海の水を酒にして泳がせろ。

一の烏　むゝ、其処で、椅子やら、卓子やら、天幕の上げさげまで手伝ふかい。

三の烏　彼れほどのものを、（天幕を指す）持運びから、始末まで、俺たちが、此の黒い翼で人間の目から蔽うて手伝ふとは悟り得ず、薄の中に隠したつもりの、彼奴等の甘さが堪らん。が、俺たちの為す処は、退いて見ると、如法これ下女下男の所為だ。天が下に何と烏ともあらうものが、大分権式を落すわけだな。

二の烏　獅子、虎、豹、地を走る獣。空を飛ぶ仲間では、鷲、鷹、みさごぐらゐなものか、餌食を掴んで容色の可いのは。……熊なんぞが、あの形で、椎の実を拝んだ形な。鶴とは申せど、尻を振つて泥鰌を追懸ける容体などは、余り喝采とは参らぬ図だ。誰も誰も、食ふためには、品も威も下げると思へ。然までにして、手に入れる餌食だ。突くと成れば会釈はない。骨までしやぶるわ。餌食の無慙さ、いや、又其の骨の肉汁の旨さはよ。（身震ひする。）

一の烏　（聞く半ばより、じろ〳〵と酔臥したる画工を見て居り）おふた、お二どの。

二の烏　あい。

三の烏　あい、と吐す、魔ものめが、ふて／〃＼しい。

二の烏　望みとあらば、可愛い、とも鳴くわ。

一の烏　いや、串戯は措け。俺は先刻から思ふ事だ、待設けの珍味も可いが、こゝに目の前に転がつた餌食は何うだ。

三の烏　其の事よ、血の酒に酔ふ前に、腹へ底を入れて置く相談には成るまいかな。何分にも空腹だ。

二の烏　御同然に夜食前よ。俺も一先に心付いては居るが、其の人間は未だ食頃には成らぬと思ふ。念のために、面を見ろ。

三羽の烏、ばさ〳〵と寄り、頭を、手を、足を、ふん〳〵と嗅ぐ。

一の烏　堪らぬ香だ。

三の烏　あゝ、旨さうな。

二の烏　いや、まだ然うは成るまいか。此の歯をくひしばつた処を見い。総じて寝て居ても口を結んだ奴は、蓋をした貝だと思へ。うかつに嘴を入れると最後、大事な舌を挟まれる。やがて意地汚の野良犬が来て舐めよう。這奴四足めに瀬踏をさせて、可いと成つて、其の後で取蒐らう。食ものが、悪いかして。脂のない人間だ。

一の烏　此の際、乾ものでも構はぬよ。

二の烏　生命がけで乾ものを食つて、一分が立つと思ふか、高蒔絵のお肴を待て。

三の烏　や、待つと云へば、例の通り、ほんのりと薫つて来た。

一の烏　おゝ、人臭いぞ。そりや、女のにほひだ。

二の烏　はて、下司な奴、同じ事を不思議な花が薫ると言へ。

三の烏　おゝ、蘭奢待、蘭奢待。

一の烏　鈴ヶ森でも、此の薫は、百年目に二三度だつたな。

二の烏　化鳥が、古い事を云ふ。

三の烏　なぞと少い気で居ると見える、はゝはゝ。

一の烏　いや、恁うして暗やみで笑つた処は、我ながら不気味だな。

三の烏　人が聞いたら何と言はう。

二の烏　烏鳴だ、と吐す奴よ。

一の烏　何にも知らずか。

三の烏　不便な奴等。

二の烏　（手を取合うて）おゝ、見える、見える。それ侍女の気で迎へて遣れ。（みづから天幕の中より、燭したる蝋燭を取出だし、野中に黒く立ちて、高く手に翳す。一の烏、三の烏は、二の烏の裾に踞む。）

薄の彼方、舞台深く、天幕の奥斜めに、男女の姿立顕る。一は少紳士、一は貴夫人、容姿美しく輝くばかり。

二の烏　恋も風、無情も風、情も露、生命も露、別るゝも薄、招くも薄、泣くも虫、歌ふも虫、跡は野原だ、勝手に成れ。（怪しき声にて呪す。一と三の烏、同時に跪いて天を拝す。風一陣、灯消ゆ。舞台一時暗黒。）

はじめ、月なし、此の時薄月出づ。舞台明く成りて、貴夫人も少紳士も、三羽の烏も皆見えず。天幕あるのみ。

画工、猛然として覚む。

魘はれたる如く四辺を※はし、慌しく画の包をひらく、衣兜のマツチを探り、枯草に火を点ず。

野火、炎々。絹地に三羽の烏あらはる。

凝視。

彼処に敵あるが如く、腕を挙げて睥睨す。

画工　俺の画を見ろ。――待て、しかし、絵か、其とも実際の奴等か。

――幕――

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成1　泉鏡花」国書刊行会
　1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行
　1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行
底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店
　1940（昭和15）年発行
初出：「新小説」
　1913（大正2）年7月
※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：川山隆
2009年5月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

紅玉

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/